

報告者名	植田今日子	被調査者生年	未確認(男)
調査者名	植田今日子	被調査者属性	早馬神社の神輿会の頭(カシラ)・唐桑町石浜在住ワカメやホタテを主とする養殖業を経営
補助調査者	なし		

2011年の早馬神社例大祭

震災から半年をすぎた2011年10月にも昨年度報告書のとおり、宿浦や小鯖、鯖立そして洋上を神輿が渡御していく早馬神社の例大祭が例年通り執り行なわれた。早馬神社が位置する宿浦には62世帯中54軒の家屋が流出するような光景が広がっていたが、神輿は例年通り早馬神社をでたあと早馬山の山麓に向かうと、更地となってしまう参道と唐桑の海を渡っていった。しかしいつもの道程にくわえて3か所の仮設住宅(燦さん館、旧唐桑小、中井小各仮設)に散ってしまった人たちのもとへ、トラックに乗せられた神輿が赴いた。また、宿浦から船で例年赴いていた小鯖、鯖立には津波で岸壁が損壊していたために2011年には船を港につけることができなかった。震災の年は仮設住宅を巡ったあと、神輿は宿浦からではなくトラックで小鯖港へ移動し、ここから船に載せられて海へ渡った。

2012年の早馬神社例大祭のルート

翻って2012年の早馬神社例大祭では、仮設住宅へと神輿が赴くことなく、震災前の従来の道程を辿った。港やその岸壁も昨年と比べて修復が進んでいた。さらに、小鯖や鯖立の沿岸に建っていた家々も津波の大きな被害をうけていたため、いつもは地元の人が迎え出て賑わいをみせた小鯖港、鯖立港にも更地が広がり震災前のような賑わいはなかった。宮城県漁協唐桑支部の青年部部長を長くつとめ、例大祭の神輿会会長をつとめる梶原氏はいう。

「去年(2011年)と今年(2012年)はただ湾の中入ってご祈祷だけして。前だったら一度オカ(陸)に上がって地元の人たち参拝するんだけど、ご神体移ってあるから神輿に。鯖立、小鯖すらほら、参拝する人ないし、海岸に。みんな高台の仮設にいるから。船から岸壁に下ろして、宮司さんがお祈りしたあと地域の人が祈ったんだけど」。

けれども、いつものように御先船に導かれ、御召船をひきつれた神輿は、唐桑半島の鼻先で3度まわり、洋上ではすべての船が静止して手を合わせ大漁が祈られた。唐桑半島の約7割の船が津波で流失したが、洋上渡御の風景には震災前と変化がなかった。「今残ってる船はほとんど沖出ししてる。この辺もみんな沖出ししたから。お祭りやるのには船が減ったというわけではないんですね。お祭りに出るような漁船はみんな沖出ししたから。助かった漁船をお祭りにつかうから。養殖船でなく。お祭りに関しては船は前とおんなじ。影響なかったね。お祭りに(ほぼ全船が流失した)イソブネつかわないからね」。

不足した神輿の担ぎ手と神輿会

「俺たち子どもの頃ってもう今のようなお祭りだったから。戦前からあったべねえ。子どもの頃からお祭りの中身はほとんど同じでねえかな」と梶原氏が語るほど変化の小さい通称「フナマツリ」は、半島根元の只越から先端の崎浜まで唐桑中がもっとも賑わう日であった。しかし唐桑の漁業や人口が変化していくなかで、「フナマツリ」は変化を余儀なくされてもいた。

神輿渡御に必要な重い神輿の担ぎ手や旗を持つ人、太鼓を持つ人、賽銭箱を持つ人などは「オロクシャク(お陸尺)」とよばれてきた。少しずつ高齢化と人手不足によってお陸尺の確保には悩まされてきていた。

「唐桑にお祭りできる地区がいっぱいあるでしょ。その地区にお世話人ってひとがいるわけさ。その地区ごとに。」

そのお世話人さんがその地区によって『お陸尺』っていうんだけどさ、それを3人から4人ずつ頼んでお祭りの人出てもらってその中から神輿担ぐ人とか旗もつ人とか行列にいく人とか、割り振りしてやってたんですけど。あるときから若い人が少なくなってきてっから、昔からだんだん少なくなってきてっから、神輿担げる人が集まるっからかぎらなくなってきたのね。年取った人が担いだりしてただけど」。

唐桑の各部落から集めると行列で旗などを持つ人だけで15~20人になった。ふたりで担ぐ賽銭箱の担ぎ手、2人で担ぐ太鼓、太鼓を打つ人など結構な人数が必要な祭りであった。さらに神輿を担ぐためには交代要員も入れると40人はほしいところだという。

「早馬山の下まで3合目くらいまで山の方へ上がっていく。小野医院のそこちょっと上がったところから早馬さんに上がるとこ。そこ200メートル上がっていく。下りはいいんだけど行くときは大変。県道から外れて山の方に入っていくから。それがちょっと過酷だけど。20人ではきついもんねえ。交代する人もいないと。肩真っ赤になって」。

そこで現在の宮司のKTさんが神輿の若い担ぎ手を確保するために「神輿会」という組織の立ち上げを漁協の青年部にもちかけた。漁協は、春のご祈祷の度に祈ってもらったり、お祭りでも事務所の前を神輿が通るときには玉串料を渡して必ず祈祷してもらおう場所となってきた。神社がそんな漁協に助けをもとめた。

「いまでも『お陸尺』はあるんだけど、神輿担ぐのだけは『神輿会』って宮司さんが、神輿の担ぎ手なくなってるから、このままではいなくなっからって、宮司さんがつくったんだけど。ちょうど俺が青年部の部長やってたときだから、その話もちかけてきて『神輿担げなくなるのは祭りでなくなるから』って。こういう風な話、宮司さんからもちかけられたんだけど。ちょうど俺が青年部の部長やってたときだから…10年以上になるかなー。5、6年は青年部やったからな。10年以上になるかもしんねえなあ。神輿担げなくなるのは祭りでなくなるから、避けねばなんねってね。漁協でみんなどうすっべつたら、いいよって。今は県外の人も何名か。もともとこっちの人で転勤になったひととか。ボランティアの人もいるし」。

こうして神輿の担ぎ手不足は回避されたという経緯があった。同じ頃、それまでなかった女性たちによる「道中手踊り」がはじまっていく。この時期を境に、担い手不足に陥りつつあった祭りが勢いを増したという。唐桑半島全域に氏子を擁するため、南は崎浜から北は只越まで、各地区から女性が各地区で揃いの着物や衣装を身にまとい、旧唐桑小学校のグラウンドから宿浦港へ向かって参道を順に踊り、練り歩いた。

洋上渡御の船の当番

何艘ものオトモセン（御供船）を引き連れてオメシブネ（御召船）に乗った神輿が海を渡っていく洋上渡御はこの祭りのクライマックスともいえる。では洋上渡御で出す船は、どのように担われてきたのか。

早馬神社の位置する宿浦と、その近隣に位置し内湾沿岸で比較的大きな港を擁する鮪立、小鯖の3つの集落が輪番で船を出してきた。宿浦、鮪立、小鯖の順にまわしている。「漁港が内湾に早馬神社祀ってあるあの、宿浦に漁港が3つあるわけさ。宿、鮪立、小鯖と。早馬神社は宿なんだけど3つの漁港があるから。その3つの漁港が1年交代で輪番制で船をだす。それがならわしだったんです。神輿積む船と、御先船（おさきぶね）っていう先頭走る船。神輿積む本船があって、オトモセンっていうのは何船あってもいいんだけど5艘から7艘ぐらい。前はもっと多かった。前はちっちゃい小船とかなんかも一緒に行ったんだけど、今は大型の船だけになってしまったけど。あの養殖船とか、2、3トンの船とかも行ったんだけど。今はもう漁船のおっきいタイプだけだね。昔はちっさい船も大漁旗をつけて」。

ではこの洋上渡御を震災後も変わることなく支えた船は、2011年の津波をどのようにやり過ごしたのか。沖出しをした際の話の話を少し伺うことができた。

石浜に船を舫っていた梶原氏は、ワカメ養殖の仕事をしているときに地震の揺れを感じ、家族に避難を呼びかけたあと船のもとに戻った。そして2トンの養殖船を沖出しした。石浜で同じように船をつないでいた人たちと一緒に固まって沖出しをした。最短ルートで沖に向かうために広田半島方面に進路をとった。10~15分くらい走れば沖に出ることができる。沖でも石浜地区の船が集まって一晩をすごした。燃料も水も充分ではない状況だった。

翌日は代表の船がオカに近づいて、食べ物ももらいに走った。他の船は洋上で待っていた。幸いカップラーメンを妻の車のトランクに積んでいたことがわかったのでお湯と一緒に船に乗り、他の船の漂う洋上に戻った。ラーメ

ンの数は足りなかったのでみんなで分け合った。結局船は助かったものの、いつもの浜は係留できる港ではなくなってしまっていた。しかし流された錨がからまった場所に船を舳うことができることがわかり、夕方には船を停泊してふたたび代表の船に皆が乗船し、2日目の夕刻にはオカに戻った。養殖船が無事であったのは、船がいわば集団行動をとったことも幸いした。